

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 18 日現在

機関番号：13401

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2011

課題番号：20720023

研究課題名（和文） 近代フランスにおける陶磁研究とシャンフルーリ

研究課題名（英文） Ceramic Research in the 19th Century in France and Champfleury

研究代表者

今井 祐子（IMAI YUKO）

福井大学・教育地域科学部・准教授

研究者番号：00377467

研究成果の概要（和文）：

シャンフルーリは、1850年頃から約20年かけてフランス革命期につくられた民衆的なファイアンスを収集した。総計547点に及ぶそのコレクションは、民衆的なファイアンスの収集・研究を促し、収集品を革命のシンボルによって分類した彼の研究は、革命史研究に資することになった。セーヴル時代（1872-1889）のシャンフルーリの交友関係は極めて広く、彼は内外の収集家・研究者の協力を受けて、国内外の陶磁器及びそれに関する文献の収集に尽力した。本研究を通して実施した調査において、小説家・美術批評家として知られるシャンフルーリの陶磁史家としての活動が、フランスの陶磁研究の発展に大きく貢献するものであったことが判明した。

研究成果の概要（英文）：

Champfleury collected popular faiences, made in the period of the French Revolution, for about 20 years from about 1850. His collection, 547 items in total, inspired people to collect and research popular faiences. Champfleury classified his faiences according to symbols of the Revolution, and his own research into faiences in turn contributed to wider historical research on the French Revolution. While he was employed in the manufactory of Sèvres and in the Ceramic Museum of Sèvres, Champfleury had a large circle of friends and acquaintances and succeeded in collecting ceramic works and documents about them from both inside and outside the country. This study has analyzed and made clear the great service that Champfleury rendered in the development of ceramic research in France.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・美学・美術史

キーワード：美術史、陶磁史、フランス文化史、ジャポニスム、日仏文化交流史

1. 研究開始当初の背景

シャンフルーリに関しては、わが国では、シャンフルーリの小説作品を論じた研究が幾つか存在するのみであり、セーヴル陶磁器博物館学芸員としての彼の活動に着目した研究は皆無であった。フランスにおいては、シャンフルーリの死後 100 周年にあたる 1989 年にパリのオルセー美術館で、その翌年にセーヴル市立図書館でシャンフルーリに関する展覧会が開催され、彼の業績が回顧された。2003 年にはボルドー第 3 大学にてシャンフルーリをテーマとするシンポジウムが開かれている。しかし、シャンフルーリの活動は多岐に亘るため、陶磁史家としての彼の活動については、本国フランスにおいても未だまとまった研究成果が報告されていない状況にあった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、19 世紀に入って本格的に進展するフランスにおける陶磁研究の系譜の中にシャンフルーリの陶磁研究を位置づけ、その意義を検討することである。

3. 研究の方法

本研究では、以下の 3 項目を解明すべく、セーヴル国立陶磁器史料館をはじめとするフランス国内の図書館・史料館、及び英国の国立美術図書館で文献調査を行った。

- (1) フランス革命のファイアンスに関するシャンフルーリの収集、及び研究の内容とその意義
- (2) セーヴル時代のシャンフルーリの収集及び研究活動の内容とその意義
- (3) シャンフルーリと世界各国の陶磁収集家・研究者との間で築かれていた情報ネットワークの実態

4. 研究成果

- (1) シャンフルーリによるフランス革命のファイアンスの収集・研究

① 革命のファイアンスの収集

シャンフルーリは、1850 年頃より約 20 年かけてフランス各地を行脚して各地に残されていた民衆的なファイアンスを入手し、総計 547 点に及ぶコレクションを形成した。彼が収集したファイアンスには、描かれた図柄に加えてその場面を説明する文字が付されており、その特徴から彼はそれらを「もの言うファイアンス (faïence parlante)」と呼んでいた。そして、その中でもフランス革命の時代 (1789-1794) に作られたファイアンス (図 1) に注目した彼は、それらを「愛国的なファイアンス (faïences patriotiques)」と呼び、とりわけその収集に励んだ。



図 1 小皿 (シャンフルーリ旧藏品)
19 世紀末 パリ、カルナヴァレ博物館蔵

愛国的なファイアンスのほとんどは民衆が日常用いる食器であるため、従来は収集の対象としてみなされていなかった。そのためシャンフルーリは、美術商ではなく農家からファイアンスを入手しており、フランス各地を訪れて手当たり次第にファイアンスを入手する彼の行動は、彼にファイアンスを発送していたヌヴェール (Nevers) の美術商 (帽子屋とも) バラ (Bara) によって「ファイアンス狩り (la chasse aux faïences)」と呼ばれた。パリのカルナヴァレ博物館の学芸員として長らく革命の陶磁器を研究したド・ラ・ヴェッシエール (Anne-Marie de La Vaissière) 女史によれば、シャンフルーリが収集したファイアンスは総計 547 点に及び、その内の 342 点が革命期に製作されたものであるという。またその多くはフランス中部のヌヴェール産であったが、1858 年から 1866 年にかけてバラからシャンフルーリに宛てて送られた手紙 (パリ装飾美術館図書館所蔵) からは、シャンフルーリの収集を支えていたのが他ならぬこのバラであったことが分かる。

英国の研究者アマル・アスフール (Amal Asfour) 女史によれば、バラの名前は 1863 年までには収集家の間で評判になっていたようであるが、その背景にはシャンフルーリ的小説やコレクションへの反響がある。収集家のファイアンスに対する異常なまでの熱意をコミカルに描いたシャンフルーリ的小説『ヴァイオリンのファイアンス (Le Violon de faïence)』(1861) は、ヌヴェールを舞台にして話が展開される。パリのモンマルトル地区ジェルマン＝ピロン通り (rue Germain-Pilon) にあったシャンフルーリの自宅には訪問客や友人が絶えなかったとされ、その中を埋め尽くすように陳列されていたファイアンスは、次第に多くの人々に知られるようになっていた。

シャンフルーリのコレクションの特色は、実態把握の難しいフランス革命の歴史を民衆の視点から学ぶための知識の源泉として、つまり歴史史料として高く評価されるようになった。1868年3月に予定されていた競売でパリ市がそれを入手する意向を示していた事実（事前の話し合いでパリ市が一括購入することが決まっております、形式的に競売で競り落とし、パリ市歴史博物館に所蔵されることになっていた）は、このコレクションの重要性を示している。しかし、この折にセーヌ県知事のオスマン男爵が提示した14,000フランの金額にシャンフルーリが納得せず（彼の要求額は15,000フラン）、結局この競売は中止され、貴重な歴史史料が公立博物館にまとまって入る機会は失われ、コレクションはシャンフルーリが死ぬまで彼のそばに置かれていた。

シャンフルーリのコレクションの影響力は、それまで単なる日用品として見なされていた民衆的なファイアンスへの人々の関心を引き起こし、その評価及び価格を大きく引き上げた点に認められる。シャンフルーリに劣らぬ熱意をもって革命のファイアンスの収集に努めた人物に、ド・リエヴィル伯爵（comte de Liesville）がいるが、伯爵はシャンフルーリの「ファイアンス狩り」に時折同行してもいた。絵画や徽章などフランス革命に関する様々な物を集める大収集家として知られた伯爵は、1880年に自身の革命コレクションの全てをカルナヴァレ博物館（パリ市歴史博物館）に寄贈するが、1896年作成の目録によれば、2,500点に及ぶその寄贈品の中には2,400点のファイアンス（小皿568点、大皿220点、その他1,612点）が含まれている。

シャンフルーリの死後の1890年に行われた競売において、彼のコレクションは無残に散逸するが、その内の115点はマンハイム（Manheim）によって競売で競り落とされ、カルナヴァレ博物館に入った（図2）。その後も同博物館には、1924年にシャルトン（Charton）の寄贈品数点、1931年には同博物館学芸員ロビケ（Robiquet）によってラブルス（Labrousse）のコレクション数点が加わり、かくして同博物館は充実した革命のファイアンスのコレクションを所蔵するに至った。しかし、同博物館の目録には極めて簡潔な記載しかないこと、また同博物館にはその他の収集家から寄贈された革命のファイアンスも多いことなどから、どれがシャンフルーリ旧蔵品あるいはド・リエヴィル伯爵旧蔵品であるかを特定することは困難であり、来歴が不明な作品も少なくないという。

シャンフルーリは、1850年代のリアリズムを巡る闘争のはげ口として、フランスの民衆芸術（歌謡、版画、ファイアンス）の収集

を行ったが、とりわけファイアンスの収集とその分類（革命のシンボルに基づく分類）は、彼を最も駆り立てた。民衆芸術において彼が注目したのは、そこに見る直截的、自発的、かつ素朴な表現であるが、その底流には芸術表現の中に偉大さや華麗さではなく、常に真摯さを求めるシャンフルーリの姿勢があった。シャンフルーリが集めたファイアンスは、民衆芸術への人々の関心を引き起こしたが、その作り手が伝える民衆の精神性は、近代芸術の刷新につながる要素のひとつでもある。また、彼が集めたファイアンスの多くは単独ではあまり価値がないが、集合することによって歴史史料としての価値を持つコレクションと化し、フランス革命研究に資することにもなった。



図2 インクスタンド
（シャンフルーリ旧蔵品）
19世紀末 パリ、カルナヴァレ博物館蔵

②革命のファイアンスの研究

フランス革命のファイアンスに関するシャンフルーリの研究は、自身が収集したコレクションに基づいて1860年より本格的に開始された。

1851年に『ル・ナショナル（*Le National*）』紙に掲載された記事の中で初めて「愛国的なファイアンス」に触れて以降、彼はフランス各地を巡ってひたすら収集に努め、多様な種類のファイアンスを入手した。しかしこの頃の彼は、歌謡や文字の他に様々な絵が描かれている多種多様な「愛国的なファイアンス」を分類することを目論んでいたものの、どのような切り口で分類すればよいのか分からずに苦戦していた。

1860年に彼は、図書館へ足しげく通って革命期の報告書、新聞、パンフレット、版画などの多くの文献資料に目を通したが、ファイアンスを分類するための糸口は見つからなかった。そんな彼に有益な情報を与えたの

が、友人の家で偶然見つけた、ヴィエイユ・ド・ヴァレンヌ (Vieilh de Varennes) が著したアルバム『パリ国民軍の軍旗コレクション (Collections de drapeaux de la Garde nationale parisienne)』(1790ないし1791)である。このアルバムは、1790年にパリやその周辺にある小教区の女性たちから国民軍へ提供された多数の旗について詳しく述べており、そこには革命のシンボルに関する説明も添えられていた。このアルバムを通してシャンフルーリは、ファイアンスに描かれた様々な図柄が革命のシンボルであることを理解し、このシンボルをてがかりにしてファイアンスを分類し、研究を進めた。その成果は、『愛国的なファイアンスの歴史 (Histoire des faïences patriotiques)』(1867)において発表された。同書は、初版の発行年度内に第2版、1876年に第3版が出ているため(初版に見られた幾つかの誤りは第2版において訂正されている)、当時においてかなり好評を博した著作であったと考えられる。

一方、シャンフルーリが収集を開始してから10年経過した1860年代には、フランス各地でシャンフルーリ以外の人物による革命のファイアンスに関する著作が刊行される。その主な著者には、ルーアン博物館のギュスターヴ・グエラン (Gustave Gouellain)、ボーヴェのウォルモン (Warmont) 博士、ヌヴェール博物館のL. デュ・ブロック・ド・スガンジュ (L. du Broc de Segange)、マレシャル (Mareschal)、ヌヴェールのフィフェ (C. P. Fieffé) とブヴォー (A. Bouveault) らがいる。彼らの著作では形式及び編年的にファイアンスが分類されており、そのアプローチは、革命のシンボルに着目して史実としてのフランス革命の理解に深く結びつけられたシャンフルーリのそれとは異なる。バラは彼らのことを「模倣者」と呼んでシャンフルーリに警告していたが、これら「模倣者」たちの研究とは対照的にシャンフルーリの研究には、ファイアンスから動乱の革命期を生き延びた民衆の心性を読み解こうとした点に特徴がある。シャンフルーリにはそれまで誰も書かなかった新しい本を著すという目的があったようだが、かくしてその目的は、彼の精力的な収集活動と独創的なアプローチ(革命のシンボルによる分類)を通して、『愛国的なファイアンスの歴史』でもって達成された。

以上のように、シャンフルーリのファイアンス・コレクションは歴史史料としての価値を有しており、そのコレクションを基にした彼の研究は、革命のシンボル別にファイアンスを分類し、陶磁研究に民衆性を導入した点に独創性がある。

(2) セーヴル時代のシャンフルーリの活動

主著『愛国的なファイアンスの歴史』(1867)の業績が評価されてシャンフルーリは、普仏戦争の混乱を経た1872年3月1日にセーヴル磁器製作所のコレクション担当者に任命され、1876年5月12日には、彼自身の希望を受け入れる形で、セーヴル陶磁器博物館の学芸員に任命された。革命の時代にセーヴルで製作された陶磁器や陶磁器関連文献にアクセスするためにシャンフルーリは、セーヴルを訪れて彼の前任者にあたる初代学芸員リオクルー (Denis-Désiré Riocreux) に世話になったことがあり、彼の仕事ぶりを理解していた。セーヴルのコレクションを充実させた功績で知られるリオクルーは、研究者の間で一目置かれる存在であったが、シャンフルーリもまた彼に劣らぬ活躍をした。

セーヴル時代のシャンフルーリは、着任早々から作品及び陶磁器関連文献の収集に努める他、1872年から始まるセーヴル磁器製作所改良委員会の業務、1876年の製作所移転に関わるコレクションの整理と移動、1878年及び1889年パリ万博への出品業務など多岐に亘る仕事をこなした。

執筆活動では、フランスの民衆的なファイアンスに関する個人研究を進めるかわら、『セーヴル製作所見学案内書』(1874)の中で製作所に関する一般の人々の理解を促す説明文を執筆し、『製作所美術品目録』(1886)では所内に点在する絵画などの各種美術品に関する情報をまとめている。またそれまでの文献目録に陶磁器関連文献の情報が不足している点を問題視したシャンフルーリは、9年の準備期間を経て、『陶磁器文献目録 (Bibliographie céramique)』(1881)を自費出版している。陶磁研究者の利便性を高めた点で画期的な同目録には、16世紀から19世紀までに書かれたヨーロッパと東洋の陶磁器に関する文献が紹介されており、利用者の利便性を考慮して、同書は2部構成で編集されている(第1部では著者別に著作を紹介、第2部は第1部で取り上げている著作を国別に分別して紹介)。陶磁器に絞って、モノグラフィイー等の発行部数の少ない資料を含む豊富な資料を紹介する文献目録は存在しなかったため、それまで誰も書かなかった新しい本を著すというシャンフルーリの目的は、ここにおいても達成されている。また同目録の中でシャンフルーリは、同時代の陶磁史家オーギュスト・ドゥマン (Auguste Demmin) の著作の不備の多さについてとりわけ手厳しい批判をしているが、セーヴル着任早々から内外の陶磁器及びそれに関する文献に触れる中で多くを学んだ彼は、名実ともにフランスを代表する陶磁史家となった。同目録の

情報量は、シャンフルーリの情報収集能力の高さを示すものであるが、同時にそれは、当時のヨーロッパにおける東洋陶磁研究の限界を伝えてもいる。というのも、『陶磁器文献目録』の中で紹介されている文献の多くはフランス陶磁器に関するものであり、次いでイギリス、ドイツ、イタリアの順で数が多く、東洋の陶磁器に関しては、中国に関して7点、日本6点、トルコ1点と僅かな数の文献しか紹介されておらず、朝鮮に関しては皆無だからである。この事実、19世紀後半のフランスにおいては、東洋陶磁器(特に中国、日本、ペルシアの陶磁器)のコレクションの充実化が図られてはいたものの、それに関する情報をヨーロッパの言語で入手することはまだまだ大変であったことを伝えている。とはいえ、シャンフルーリの『陶磁器文献目録』は当時のヨーロッパで入手可能であった中国及び日本の陶磁器に関する最新かつ重要な情報を備えている。また同目録の着想は後に、ルイ・マルク・エマニュエル・ソロンの著作『陶磁器文献(Ceramic Literature)』(1910)へ受け継がれている。より幅広い時代や国と地域をカバーするソロンの著作は、シャンフルーリが果たせなかった夢を叶えるものであった。

その他、シャンフルーリのセーヴル時代(1872-1889)は欧米においてジャポニスム(日本趣味)が流行した時期にあたり、セーヴルの日本陶磁器コレクションが充実するのもこの頃である。パリで活躍した美術商からの購入品に加えて、1880年の明治政府寄贈品(63点)、1880年の蝸川式胤寄贈品(15点)、1882年のE. ヴィアル寄贈品(40点)などの比較まとまった日本陶磁器コレクションがセーヴル陶磁器博物館の所蔵品に加わっている。

フェリックス・ブラックモンの親友で、1864年に結成された「産業応用芸術中央連合」(1877年に「装飾芸術中央連合」と改名)の創立メンバーでもあったシャンフルーリは、早い時期からの日本美術愛好家であったため、日本陶磁器に対する彼の関心も高かったと推測される。しかし、日本陶磁器に関するシャンフルーリの著作はなく、本研究を通じて実施した調査においても、彼が日本陶磁器に関して執筆を試みていたことを示す草稿などを見つけることはできなかった。しかし、当時フランスを訪れていた日本人やパリの美術商とシャンフルーリの交流を跡付ける手紙が残されていること(セーヴル陶磁器史料館蔵)、上述の『陶磁器文献目録』の中で蝸川式胤著『観古図説陶器之部』がフランスにおける本格的な普及に先駆けて紹介されている点などから、シャンフルーリが当時のフランスにおいていち早く日本陶磁器に関する情報を入手していた人物のひとりである

ことは確実である。また1886年6月10日には、パリで活躍した日本人美術商の林忠正がセーヴル陶磁器博物館を訪れ、所蔵されている日本陶磁器に関する情報(産地・製作年代等)をシャンフルーリに提供している。

1887年7月15日、シャンフルーリは学芸員を兼任する形でセーヴル製作所の副所長に任命され、その後益々の活躍が期待されていたが、1889年12月7日にインフルエンザが原因で急逝した。20年未満の在任期間ではあったが、単独で多岐に亘る学芸員の仕事をこなしたセーヴルにおける彼の健闘は、賞賛に値するものと言える。とりわけ彼の在任中に、セーヴル陶磁器博物館の作品と文献のコレクションが大幅に増強されたことは特筆に値する(1852年に12,000点であった収蔵作品は、1889年には23,346点になった)。

(3) シャンフルーリの情報ネットワーク

セーヴル時代のシャンフルーリの活動を支えていたものに、情報ネットワークがある。セーヴル陶磁器史料館に所蔵されている「シャンフルーリ関連史料」の中には、在任期間中に彼が受け取った数多くの手紙が含まれているが、それらの手紙の差出人は、内外の研究者、収集家、外交官、作陶家、芸術家など幅広い人々である。これらの手紙は、学芸員としてのシャンフルーリの多忙さ、及び彼の交友関係の広さを伝えるものである。これらの一次史料は本研究開始前には把握していなかったが、本研究に従事する中で、その存在を知れたことは幸いであった。シャンフルーリの陶磁器を巡る情報ネットワークについては、フランスにおいても未だほとんど研究されていない。所蔵先での史料整理が終了(2012年末)以降、当該史料によりアクセスしやすくなるため、今後も引き続き同史料に根気強くあたり、シャンフルーリの活動について調査すべきであると考えられる。

シャンフルーリの交友関係は極めて広いが、本研究で実施した調査において把握できた人物の中で、シャンフルーリに外国陶磁器に関する情報を提供していた主な人物を挙げると、以下の通りである。

【イギリス陶磁関連】

オーガスタス・ウォラストン・フランクス (Augustus Wollaston Franks, 1826-1897)

スイス生まれ。イギリスで活躍した学者。1851年より大英博物館の学芸員(1896まで)を務める。彼からシャンフルーリは、イギリス陶磁器やロンドンの収集家に関する多くの情報を得ている。フランクスは、セーヴルの図書館へ自著を寄贈している。

ルイ・マルク・エマニュエル・ソロン(Louis Marc Emmanuel Solon,1835-1913)

フランスの作陶家。国立セーヴル磁器製作所を経て1870年より英国ミントン社で活躍した。ソロンには英国陶磁器に関する著作もある。

【イタリア陶磁関連】

ウジェーヌ・ピオ(Eugène Piot, 1812-1890)

フランスの美術史家、出版者、批評家、写真家、筆名はネモ(Nemo)。イタリア滞在経験のあるピオよりシャンフルーリは、彼が収集したイタリア陶磁器に関する文献を閲覧させてもらっている。ピオには陶磁器に関する著作もある。

【ベルギー陶磁関連】

フレデリック・フェティ(Frédéric Fétis)

ブリュッセルの法学者。余暇の楽しみとして、フランドル地方の陶芸の起源について調べていたフェティより、シャンフルーリは多くの貴重な情報を得ている。

【日本陶磁関連】

平山成信(ひらやま・せいしん/なりのぶ/しげのぶ, 1854-1929)

農商務省、外務省などで活躍した明治日本の官吏。1878年万博の際には事務官としてパリで活動し、その後は在フランス日本大使館に駐在。蜷川式胤著『観古図説陶器之部』第1巻の翻訳者。

林忠正(はやし・ただまさ, 1853-1906)

パリで活躍した日本人美術商。シャンフルーリは、パリ9区にあった林の店を訪れたり、林からセーヴル陶磁器美術館所蔵の日本陶磁器についての情報を得たりしている。

【韓国陶磁関連】

コラン・ド・プランシー(Victor Eile Marie Joseph Collin de Plancy, 1853-1924)

フランス人外交官。長くソウルに滞在して美術品を収集した。ド・プランシーは、自身の朝鮮陶磁コレクションをセーヴル陶磁器博物館に寄贈している。

以上の通り、本研究を通して実施した調査において、小説家・美術批評家として知られるシャンフルーリの陶磁史家としての活躍は、セーヴルひいてはフランスの陶磁研究の発展に大きく貢献するものであったことが判明した。また、近代フランスにおける陶磁研究はヨーロッパに次いで東洋のやきものを重要視しており、歴史家の書誌学的研究と化学者の自然科学的研究の双方が補完しながら進展し、ひいてはそれが作陶家の実践に大きく影響していた事実も明らかになった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

① 今井祐子「エルネスト・シャプレとアール・ヌーヴォー——科学の世紀の釉薬を制して」『表現文化研究』、第9巻第1号、43-64頁、平成21年(2009年)、査読無。
(<http://www2.kobe-u.ac.jp/~shuichin/scbdmmt/jp/index-j.html>)

② 今井祐子「陶磁史家シャンフルーリの誕生」『表現文化研究』、第10巻第2号、109-126頁、平成23年(2011年)、査読無。
(<http://www2.kobe-u.ac.jp/~shuichin/scbdmmt/jp/index-j.html>)

③ Yuko IMAI, « Champfleury et la céramique japonaise », *Cahiers Edmond et Jules de Goncourt*, n° 18, Paris: Société des amis des frères Goncourt, 2011, 査読無。
(2011年11月発行予定であったが、編集者側の都合により2012年11月へ延期)

④ Yuko IMAI, « Les Coulisses de l'Exposition Universelle de 1878 à Paris : La Manufacture de Sèvres et le Japon », *Bulletin de la Société franco-japonaise d'art et d'archéologie*, n° 31, Japon : Société franco-japonaise d'art et d'archéologie, 2012, 査読有。

〔図書〕(計1件)

① 今井祐子「19世紀末における西洋陶磁の発展と特徴」『もてなす悦び展』カタログ、三菱一号館美術館、2011年、98頁。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

今井 祐子 (IMAI YUKO)

福井大学・教育地域科学部・准教授

研究者番号：00377467